

【研究ノート】

蘇軾の送別詞について

保 莉 佳 昭

1 はじめに

北宋時代(960～1126)の蘇軾(1037～1101)は、詞という文学ジャンルに新境地を開いた。具体的にいえば、従来、心象風景を多用し、女性の姿態、恋愛、惜別、孤独感等を中心に詠われた作風に、役人生活、愛国心、農村農民の様子、望郷の念、人生観等、新しい題材を加えたのである。筆者は、これまでこの蘇軾の詞における新境地に着目し、小稿を幾つか発表してきたが¹⁾、本稿では送別の作品を取り上げて、そこに見られる新境地を考察してみる。特に送別の作品を取り上げるのは、別れというテーマは、従来、詞で非常に多く詠まれてきた主要な創作テーマであり、そのため、蘇軾の送別の詞を考察すれば、以前から詠み継がれてきた部分と、彼が初めて詠み入れた部分とが見分けやすく、蘇軾詞の新境地をよりはっきりと浮き彫りにすることができるからである。

蘇軾が詞を本格的に作り始めるのは、杭州(浙江省)の通判(副知事)を務めていた時期からである。当時、杭州には張先(990～1078)を中心とする作詞サークルがあり、彼もそこに加わり、先輩からの手ほどきを受けた²⁾。この時期は、彼にとって詞の習作期であり、蘇軾詞の原点とも言える。この時期に作られた送別詞に関しては、既に呉宇娟氏に「論蘇軾任杭州通判時期送別詞的特色」という先行研究がある³⁾。この論考は、表題通り、蘇軾が杭州通判を務めていた時に作った送別詞について考察したものである。呉氏はその中で「従来の蘇軾の詞を論ずる多くの研究者は、彼の作品を『豪放』の2字で括っているけれども、杭州通判時期の送別詞について言えば、情感を婉曲に描き、含意にあふれている」とまとめている⁴⁾。この時期は、先に指摘したとおり、彼が詞を盛んに作り始めた習作期である。であれば、その時期に、作詞において従来の詞の特徴である「情感を婉曲に描き、含意にあふれている」スタイルを踏襲するのは当然であり、呉氏の指摘は正しい。ただ、もし彼の送別詞における新境地を探ろうとするならば、むしろ、杭州を離れた後、張先を中心とする作詞サークルから離れて独り立ちした時期の作品を検証するべきであろう。そこで、本稿では、「蘇軾の作詞における独り立ちの時期」、すなわち、杭州離任後から湖州(浙江省)知事在任中に逮捕される前までに作られた送別詞を対象にする⁵⁾。この間に作られた蘇軾の送別詞は、現在14首残されているが、本稿ではその中で、特に新境地が認められる6首の詞を取り上げて考察してみる⁶⁾。なお、テキストは『蘇軾詞編年校注』⁷⁾を用い、適宜『蘇軾年譜』⁸⁾を参考にした。また、1首の作品構成として前後半に分かれ

る詞の場合は、途中に「／」の記号を入れて区切った。

2 別れに言及しない詞

熙寧7年(1074)9月、蘇軾は杭州通判から密州(山東省諸城)知事に転任することになった。その時、杭州知事の楊繪(1032~1116)も都に召還されることになり、二人は一緒に杭州を離れ、湖州まで同道した⁹⁾。その後、二人は当地で別れたが、その際、蘇軾は都に旅立つ楊繪を送る「南郷子」という詞を2首作っている。これらの詞には、従来の送別詞とは異なる内容が詠まれており、蘇軾が杭州を離れて間もなく、詞に新たな境地を切り開こうとしたことが分かる。本節では、まずこの「南郷子」詞から見ていくことにする。

南郷子

裙帶石榴紅。却水殷勤解贈儂。応許逐鷄鷄莫怕，相逢。一点靈心必暗通。／何処遇良工。琢刻天真半欲空。願作龍香双鳳撥，輕攏。長在環兒白雪胸。

【大意】スカート^{ちんちゆう}の帯はザクロの花のように赤い。水をはじく不思議な力を持つサイの角を、(沈沖は楊繪に)懇ろに贈ってくれることだろう。(沈沖は)文犀^{ぶんせい}を君(楊繪)に嫁がせるのを許してくれるから、君は心配しなくていい。知り合ってから、二人の心は密かに通じ合っているのだから。／どこかで名工に出会い、天然の素晴らしい玉を半分くりぬいて(鈴に)仕立てたいものだ。私は撥^{ばち}になり、軽く琵琶を奏で、いついつまでも(美女の)白い胸元にいたい。

本詞には、「沈強輔^{あざな}雯上出文犀麗玉作胡琴，送元素，同子野各賦一首」という短い序が付いている。意味は「沈沖(生卒年未詳，強輔は字)が雯上(地名であろうが未詳)で、文犀と麗玉の2人の妓女を酒宴に呼び出し、琵琶(胡琴)を演奏させ、楊繪を送別した。(私は)張先と共にそれぞれ詞を一首ずつ作った」ということである。この序から、本詞が楊繪を送別した時に作られた作品であることが分かる。しかし、詞の内容を見ると、送別の作であることを窺わせる部分はほとんどない。

詞の前半は、文犀のことを描く。楊繪と文犀は心を通じ合っていた。それを知った蘇軾は、この詞を作って、楊繪をからかい、沈沖に二人の思いを叶えてくれるよう頼んだのである。文犀とは、「模様のあるサイの角」という意味であり、蘇軾は彼女のことを「不思議な力があるサイの角」と表現する。おそらく彼女は妖艶で魅惑的な女性であったのだろう。これに続く後半は麗玉を詠う。「麗玉」とは、「美しい玉石」という意味であり、それを「美しい音色の出る玉石の鈴に加工してみたい」という。おそらく、麗玉が美声の持ち主であり、それを鈴になぞらえて称えたのであろう。そして、最後は琵琶を詠み込み、「自分は琵琶の撥となり、この美しい妓女達の胸元にいたい」と結ぶ。

本詞は、序に「楊繪を送別する(送元素)」と述べながら、別れには言及していない。酒席に侍った二人の女性のことを中心に述べ、その美しさを称えている。酒席の女性を描くのは、詞の常套である。しかし、別れの作品にしては、異質なものを感じる。それは、

別れを悲しんで流す涙も、惜別の情も言葉も書かれておらず、むしろ、女性の美しさが前面に出ているからである。もし、序を読まなければ、送別の作とは分からないであろう。しかし、見方を換えれば、新たな送別詞の誕生ともいえる。この時、蘇軾はもちろん別れの辛い思いを抱いていた。しかし、詞では惜別の情にあえて触れず、むしろ、別れまでに残された時間を、笑顔で楽しもうという気持ちの方を大事にした。従来、悲しみの思いを全面に出すことで、相手への深い惜別の情を訴えるのが送別詞の常套手法であった。それを踏襲せず、「笑顔での別れ」を演出したのが本詞ではないか。

3 豪胆の詞

楊絵を見送った際に作られたもう1首の「南郷子」詞は、次のとおりである。

南郷子

旌旆滿江湖。詔發樓船万舳舻。投筆將軍応笑我，迂儒。帕首腰刀是丈夫。／粉淚怨離居。喜子垂窓報捷書。試問伏波三万語，何如。一斛明珠換綠珠。

【大意】旗が江湖に満ち、詔勅が出されて、多くの戦艦が次々と並ぶ。後漢の班超は世事に疎い儒者（である私）を笑うに違いない。頭巾をかぶり腰に刀を差すのが一人前の男なのだから。／化粧をした妓女は別々に暮らす悲しみに涙を流す。クモが窓に巣を張り、勝利の知らせが届くことを告げる。伏波將軍の三万語（に上る長文の勝利報告書を書いて）はどうですか。君は綺麗な真珠を美女と交換して連れて行くのでしょうか。

本詞は、先に見た第1首目の「南郷子」詞と打って変わり、一見して分かるように、戦に関わる言葉が数多く使われている。なぜこのような内容になったかといえ、この時、同席していた張先が作った「定風波令」という詞¹⁰⁾に「浴殿詞臣亦議兵，禁中頗牧党羌平（翰林学士の文官である君は、兵事についても意見を述べ、朝廷では大將軍が異民族を平定する策略を回らせている）」とあり、楊絵が文官でありながら、軍事について論じることのできる才覚を有していたからである。蘇軾は楊絵との別れに際し、彼の兵事の才能を称賛する詞を作り贈った。本作は、前の「南郷子」詞とは、まったく違った内容になっており、非常に興味深い。

さて、本詞の冒頭2句は想像である。楊絵は中央政界に戻り、大將軍と席を並べて、遼（1032～1227）や西夏（1038～1227）といった北宋を侵略する北方異民族国家への対抗策を議論する。楊絵は主戦論者であり、出兵を主張する。結局、彼の意見が採り入れられ、多くの軍艦が異民族を討つために、出港の準備をする。詞の冒頭2句はその場面を描く。蘇軾は、ここで、後漢時代（25～220）の軍人である班超（32～102）を出して、楊絵に重ね合わせる。班超は異民族の匈奴と戦って西域の50国以上を後漢に帰属させた著名な武人である。それに続いて、楊絵の口を借りて、自らを「世事に疎い儒者」と嘲する。楊絵は普段から意気軒昂で、異民族を武力で倒すことを唱えた猛者であった。それを強調するために、自分を「世事に疎い儒者」と言ったのである。本詞の前半は、勇ましい語調で綴ら

れており、従来の心象風景を多用し、惜別の思い、悲しみを前面に出す手法とは、非常に対照的である。

ところが、後半の冒頭になると、勇ましい言葉は一旦途切れる。詞の常套手法である「女性の惜別の涙」が語られる。この場面の切り替えは、巧みな演出といえよう。戦艦と将軍のイメージから、一転、別れの涙を流す女性の姿に変わる。この巧みな場面転換は、読者に本詞が送別の作品であることを印象付け、「詞」であることを改めて意識させる。但しその後は、また戦の話に戻る。「クモが窓に巢を張る」とは、吉兆を意味する。ここでは、戦の勝利を告げる知らせが続くことをいう。楊絵が奏上した戦略によって、北宋の軍隊は大勝利する。「伏波」は、後漢初期の武将である馬援（紀元前14～49）のこと。彼は数々の戦功を立て、伏波将軍に任命され、ベトナムへ行き反乱を平定した。蘇軾は最後に「戦功を立てた暁には、長文の戦勝報告書を書いてはどうですか」と楊絵に勧める。それは、彼がれっきとした文官であり、「あなたほどの才能の持ち主でなければ、長文の戦勝報告書は書けません」と言って、その文才を称えた言葉である。これに続く詞の最後は、一転してまた女性のことを述べる。「あなたはこれから都に行かれますが、美女を伴って行くのでしょうか」というのは、楊絵をからかって言った言葉である。この「美女」とは、第1首「南郷子」詞に詠まれていた「心が互に通じ合っている文犀」を指す。豪胆な詞でありながら、最後を諧謔の言葉で結ぶのは、なかなか巧みな手法である。

北宋は、北方異民族の侵略に手を焼いていた。真宗皇帝の時（997～1022）に、遼からの侵攻を受けて、平和維持のために「澶淵の盟」（1004）を結んだ。この盟約で、両国は国境を現状維持とし不戦を誓い、北宋が遼を弟とし、遼に対して年間絹20万匹と銀10万両を贈ることなどが決められた。それに加えて、西夏からも、しばしば侵略を受け、そのため、北宋にとって北方異民族問題は、常に国家の重大事であった。

このような状況下、蘇軾は「南郷子」詞を作り、開戦論を展開して、戦勝を綴った。それは、彼が現状に忸怩たる思いを持っていたことを物語る。心象風景を多用し、情感を盛り込み、女性の姿態や別れの辛く悲しみ、孤独感等を詠んできた詞で、このような開戦論を展開するのは、かなりの冒険である。また、この作品が杭州を離れてすぐに作られたことも見逃せない。あたかも蘇軾が「習作期から創作期に移った」と宣言しているかのようであり、独自路線に転換しようとする彼の強烈な意識の表れと見做せる。ここからは、詞に新境地を切り開こうとする彼の意欲がよく見て取れよう。しかしながら、蘇軾は、「詞」という文学様式を用いていることも強く意識している。後半の初めに「女性の悲しみの涙」を描き、最後は「美女を伴って都に行く」という諧謔の言葉で作品を結んでいるからである。本詞は、内容の展開に工夫が凝らされ、新機軸を打ち立てながらも詞の常套手法を巧みに入れ込んだ革新的な意欲作といえる。

この「南郷子」詞の特徴については、既に先人に言及がある。例えば、朱靖華（1928～2008）氏は、蘇軾は詞の作風を広げ豪胆な気概を詠み込んでいると指摘した上で、本詞に論及し、「世事に疎い儒者になることを望まず、頭巾をかぶり腰に刀を差す後漢の班超と、国のために外敵を倒す勇敢な馬援を強く敬慕している」^{注11)}と述べている。また、葉嘉瑩氏は「詔發樓船万舳舻」と「帕首腰刀是丈夫」の句が豪放の極みであり、詞の新境地を如

実に表していると指摘する¹²⁾。ただ、これらの指摘には、本詞が送別の作品であるという指摘は特に無い。むしろ、ここで注目すべきは、従前、別れの悲しみが綴られ、情感を前面に出す手法で書かれ続けてきた送別の詞に、豪胆な内容を詠み込んだ点である。加えて、杭州を離れてすぐに作られた作品であることも注目しなければならない。

これに類する作品は更にある。少し後になるが、同じ「作詞における独り立ちの時期」の元豊元年（1078）7月、徐州で梁交（生卒年未詳）を送った時に作られた「浣溪沙」詞である。

浣溪沙

怪見眉間一点黄。詔書催發羽書忙。従教嬌淚洗紅妝。／上殿雲霄生羽翼，論兵齒頰帶冰霜。婦来衫袖有天香。

【大意】眉間に現れた黄の色を、「どうしたことか」と見る。詔と軍事文書が次々と出される。（君との別れに）美女が化粧顔を濡らし涙を流すが、慰める手だてもない。／君が参内する姿は、翼を生やして雲の上まで飛び上がるよう。兵事を厳しい口吻で皇帝に語る。戻って来た時、袖には宮廷の香りが染み付いていることだろう。

この詞には「彭門送梁左藏（徐州で梁左藏を送った）」という小序が付いている。「左藏」は武官の官位の1つで、梁交が武官であったことが分かる。彼は、この時、莫州（河北省任丘）へ知事として赴任するため、徐州から旅立った。莫州は外敵の遼との国境に近く、梁交は武官でありながら知事に任命され、前線での警備を任された。詞の冒頭にある「眉間に黄色の色が現れる」というのは、中国の迷信で吉兆とされるもので、ここでは、梁文が莫州の知事へ榮転することを意味する。蘇軾は梁交と会い、まず、「あれ、いつもと違うぞ。何かいいことがあったな」と感じた。そこで、話を聞いてみると、莫州知事任命の詔勅が届いたことを知る。また、梁交赴任にともない、国境を守るために、都から次々と莫州へ軍事文書が出される。それは、梁交が要望したものであり、そこからは、彼の国防に対する強い意気込みが窺い知れる。

詞は、ここで一転して、別れの悲しみに変わる。残された女性が涙を流す姿を描く。先に見た「南郷子」もそうであったが、勇ましい内容から、一転して「女性の涙」に変わる。この場面展開は、前作と同様、非常に対照的であり、読者の意表を突く。

後半は、「女性の涙」から、また、武人の姿に戻る。それは、朝廷に参内する颯爽とした梁交の姿である。彼は卓越した軍事の才能を持ち、莫州で戦功をあげ、朝廷に召還されて皇帝から下問される光榮に浴す。「兵事を厳しい口吻で皇帝に語る」というのは、口角泡を飛ばして皇帝に異民族を討つよう迫っている場面である。このような梁交の姿を想像して詠んだのは、蘇軾が自分の思いを重ねているからである。蘇軾は、屈辱的な盟約を結び、表面的な和平状態を維持している現状に不満を持っていた。その思いを、朝廷で梁交が口角泡を飛ばして皇帝に兵事を語る姿を借りて詠んだのである。

以上、豪胆な詞を見て来た。これらの作品を読んで、すぐ頭に浮かぶのが、次の「江城子」詞であろう。

江城子

老夫聊發少年狂。左牽黃。右擎蒼。錦帽貂裘，千騎卷平崗。為報傾城隨太守，親射虎，看孫郎。／酒酣胸膽尚開張。鬢微霜。又何妨。持節雲中，何日遣馮唐。會挽彫弓如滿月，西北望，射天狼。

【大意】年寄りが気まぐれに若者の血気を起こしてみる。左手で獵犬を引き，右手に鷹を持つ。錦の帽子と貂の皮衣，千騎を従え岡を席卷する。町中の人々が知事の私を見に来てくれたことに酬いるために，自ら虎を弓で射抜き，孫権の勇猛さをお見せしよう。／酒がたけなわになり，この胸の思いを吐露する。鬢髪のおずかな白髪も，構わない。いつの日か皇帝の命令をもらい，外敵征伐に赴かん。その時は必ず弓を満月のように引き，西北を望み，侵略軍を射抜いてやる。

本詞は，熙寧8年（1075）10月，密州知事を務めていた時の作である。蘇軾は常山（密州の郊外ある山）で雨乞いの祀りを行った。その後，狩りをして，酒宴を開き自らの気概を詠った¹³⁾。前半は狩りの様子を描き，勇猛果敢な自らの姿を描く。後半は，狩りで高ぶった気持ちのままに酒を酌み，自ら弓を持ち侵略してくる異民族を打ち破ろうとする気概を声高に訴える。蘇軾研究の泰斗である王水照氏は「蘇軾の詞は，密州時代に大きな発展をとげ，初歩的な形で豪放詞風ができあがったといえる」と指摘し，この「江城子」詞について「このように昂揚し，敵愾の情に満ちた作品は，詞として初めての出現であった」と述べている¹⁴⁾。

密州知事の時代も「蘇軾の作詞における独り立ちの時期」である。この「江城子」詞は，この時期の作品であり，自らの豪胆な気概を述べ，間違いなく新境地を切り開いた意欲作である。ただそれ以前に，外敵を打ち負かそうとする豪胆な気概を述べた詞が作られていることも，必ず論及するべき蘇軾詞の特徴である。作詞において，「独り立ち」して間もない時期に，この様な詞を作ったのは，蘇軾が積極的に新境地を拓こうとする前向きな作詞姿勢を持っていたことを物語るといえよう。

4 自省自嘆の詞

蘇軾の送別詞の特徴として，もう1点，指摘しなければならないのが「自省自嘆の詞」の存在である。別れの場面で綴る詞は，旅立つ人への餞である。だから，そこに詠まれるのは，本来，惜別の情，二人の思い出，相手への別れの言葉である。前節で豪胆の詞を見たが，その書きぶりは新奇ではあったけれども，そこに綴られているのは，贈る相手が活躍する姿，その才能を称える言葉であり，その意味では「餞の作品」となっている。蘇軾はその一方で，相手を送る詞でありながら，その大半を自分の不遇，帰郷が叶わぬ思いを綴った作品を作っている。本節の「自省自嘆の詞」とは，そのような意味である。

熙寧8年（1075）冬，密州知事を務めていた蘇軾は，同僚の趙昶^{ちやうちやう}（生卒年未詳）が故郷の海州（江蘇省東海）に帰るのを送った。その時，2首の「減字木蘭花」詞を作っている。本節では，まず，この2首の作品を見てみる。

減字木蘭花

賢哉令尹。三仕已之無喜愠。我独何人。猶把虛名玷搢紳。／不如歸去。二頃良田無覓處。歸去來兮。待有良田是幾時。

【大意】楚国の宰相であった子文は賢明であった。三度仕官の願いが叶っても喜ばず、三度職を失っても腹を立てなかった。それにしても私は一体どのような人間なのか。いまだに虚名に汚れた士大夫だ。／故郷に帰るのに勝るものはない。しかし、二頃の良い畑を見付けられない。故郷に帰ろう。ただ良い畑を手に入れるのは、いつになるのか。

この詞には、「送東武令趙晦之（東武県の長官である趙晦之を送る）」という小序が付いている。「東武」は、密州にある県の一つで、「晦之」は趙昶^{あきな}の字である。詳しいことはよく分からないが、この時、趙昶は職を失って故郷に戻るようになった¹⁵⁾。詞の冒頭は、それを踏まえる。「子文」は春秋時代初期の楚国の宰相であった鬬穀於菟（生卒年未詳。子文は字）のこと。「令尹」は、楚国の宰相に当たる職名であり、彼は三度にわたり宰相となったが嬉しそうな顔をせず、三度にわたり罷免されたけれども恨むような表情を見せなかった。これは『論語』「公冶長」に見える逸話であり¹⁶⁾、ここでは、罷免されても恨むような素振りをしていない趙昶を指す。

理由はどうあれ、趙昶は帰郷できることになった。蘇軾はここで、「自分は恋々として役人にしがみつき恥ずかしい」と言う。もちろんそれは、職を失った趙昶を元気付け、慰めるために言ったものであるが、詞の後半になると、あたかも趙昶のことは忘れてしまい、ひたすら自分の境遇を嘆く口調へと変わってゆく。

「歸去來兮（帰りなんいざ）」という言葉は、薄給のためにペコペコする役人生活に嫌気がさし、何のためらいもなく田園の家に帰った東晋時代の陶淵明（365～427）の名せりふである。彼が書いた「歸去來の辞」は「故郷に帰ろう（歸去來兮）」という詠い出しで始まり、役人を辞めて故郷に帰る時の思いが綴られている。蘇軾は陶淵明を敬慕し、彼の生き方に共感し、自分も早々に役人生活から退き故郷に帰りたいという願望を常に抱いていた¹⁷⁾。ただこの願いは、そう簡単には叶わない。本詞の後半では、その満たされない思いが、趙昶の帰郷が引き金になり、一気に噴き出てきた感がある。故郷に帰って晴耕雨読の生活をしようにも、今の彼には肝心の「良田」がない。もちろん、「良田」があれば、すぐに職を辞めて田舎に引っ込める訳ではない。様々、潔く身を引くことのできない事情もある。ただそれを「良田が未だ手に入らないから今は叶わない」と自らに言い聞かせているのである。

本詞は、「私は役人を辞められず故郷に帰れない。それに比べると、故郷に帰ることのできる君は羨ましい」と言い、失職して帰郷する趙昶を慰めたものであることは間違いない。ただ後半になると「故郷に帰りたい。でも良い畑が無い」という言葉の繰り返しで、自分の望郷の念をひたすら綴ったものになっている。本詞は送別の席で作られたものであるが、自らの境遇を振り返り、役人生活にしがみつき故郷に帰れない自分を嘆く思いが綴られている。

趙昶を送別した時に作られた第2首目の「減字木蘭花」詞は、次のとおりである。

減字木蘭花

春光亭下。流水如今何在也。歲月如梭。白首相看擬奈何。／故人重見。世事年來千萬變。官況闌珊。慚愧青松守歲寒。

【大意】春光亭のもと。以前（二人が会った時に見た）川の水はどこに行ったのか。歲月は瞬く間に過ぎていく。君との再会に白髪頭になってしまうのも、仕方がないことだ。／古い友人と再会する。世の中は、この数年というもの、千變万化している。私の役人生活は惨憺たるもの。年末の寒さの中でも緑を保つ松のようにはなかなか耐えられるものではない。

この第2首目には、再会の思いと、第1首と同様に役人生活への嘆きが綴られている。蘇軾はかつて趙昶と「春光亭」で会った。その後、月日は瞬く間に過ぎゆき、二人は年を取って再会し、気付けば髪の色は白くなってしまった。二人は、会わなかった間の事を語り合う。その話題は、めまぐるしく変わる世の中のことであり、より具体的にいえば、王安石の改革を指す。王安石は、均輸法（1069年7月）、青苗法（1069年9月）、農田水利法（1069年11月）、保甲法（1070年12月）、募役法（1071年10月）、方田均税法（1072年3月）、市易法（1072年3月）等、ここにきて北宋の財政再建のための新法を次々と出し、国家財政の急進的改革を断行した。そのため、中央政界では、この改革の進め方に反対する人々が現れ、両者の間に争いが起こり、結局、反対派の人々は敗れて冷遇される憂き目に遭った。蘇軾も改革が必要であることは分かっていたが、王安石の急進的な政策には反対の立場を取り、その結果、いま都を離れて地方官暮らしをしている。本詞の最後で、「役人の世界は殺伐として、自分の役人生活は惨憺たるもの」とは、自分の境遇を嘆いた言葉である。また「苦境に遭って節操を保つのは難しい」というのも、自らを省みて言ったものである。松は常緑樹で節操の象徴とされる¹⁸⁾。蘇軾は自分の意志で地方に出たけれども、やはり、地方官暮らしはそう楽ではない。かといって、すぐさま退職して故郷に帰れるわけでもない。日々の煩雑な公務に追われ、蘇軾は当時、心が折れそうになっていた。本詞は趙昶を送った時に作られたものであるけれども、最後は、蘇軾が自身の境遇を嘆く内容になっている。

さて、「自省自嘆の詞」は更にもう1首ある。徐州（江蘇省）で作られた「臨江仙」詞である。

臨江仙

自古相従休務日、何妨低唱微吟。天垂雲重作春陰。坐中人半醉、簾外雪將深。／聞道分司狂御史、紫雲無路追尋。淒風寒雨是駸駸。問囚長損氣、見鶴忽驚心。

【大意】昔から休務の日は、（酔って）小声で歌を口ずさむことも構わない。空には雲が重く低く垂れこめ、春の曇りになる。酒席の人々は半ば酔い、簾の外は雪が深まろうとしている。／聞く所では杜牧は自由人であったとか。ところが今日は妓女の紫雲の姿を見付けられない。骨に染みる風と冷たい雨が強まる。私は囚人の尋問で常に鬱憤が溜まっていたが、鶴を見て、はたと身を退く志を思い出した。

本詞は、元豊元年（1078）正月、徐州で作られたもので、「李公恕を送る（送李公恕）」という序が付いている。李公恕（生卒年未詳）という人物はよく分からないが、この時、

都に召還されることになったようである¹⁹⁾。

さて、作品の前半は、春の雪が降り積もる中、休日に宴席を開いて、ほろ酔いになった蘇軾自身の姿を詠む。この日は休日であり、皆はくつろぎ、歌を口ずさむ。外は雲が垂れ込め、人々がほろ酔いになった頃に、降り出した雪は深く積もり出してきた。疲れをいやすための静かな酒席と、音を立てることなく降り続く雪を描く。

続く後半は、まず唐の杜牧(803~853)の逸話を踏まえる。彼は李愿^{りげん}(?~825)が開いた酒席で、紫雲という名の妓女が気に入り、李愿に「私にください」と言った。蘇軾はこの杜牧の行動を「狂」の字で表現する。ここでの「狂」は、既成の枠に囚われず自由に振る舞うことを意味する。本詞の「今日は妓女の紫雲の姿を見付けられない」というのは、「酒席に美女がない」ということではない。蘇軾が言いたいのは、「自分は今、世間の束縛から抜け出して自由になりたいけれども、そのすべが無い」ということである。これは自らの境遇に対する嘆きの言葉であり、本詞の結びに繋がる。蘇軾は山積する訴訟の対応に追われ気分が塞いでいた。日々の仕事に忙殺され、自らを省みることを忘れていた。そんな時に、彼は鶴を見てはっと気付く。自分は「世俗から早々に身を退き隠棲する」という高い志を持っていたのだと。鶴は仙人が乗り、隠者が飼う特別な鳥である。それは、俗世を離れた境地を象徴する。杜牧の逸話は、隠棲とは直接繋がらない。しかしながら、「世間の束縛から抜け出して自由になる」という意味では重なる。

蘇軾は李公恕を送る際に、自らの境遇を嘆き、自由への憧れを詠む。結局、李公恕への餞の言葉もなく、送別の様子も描かれず、本詞は、あたかも都に榮転する李公恕に、自分の愚痴を語っているかのような作品になっている。李公恕と蘇軾とが、どのような関係、間柄であったのかはよく分からないが、送別の時に作った詞に、ひたすら自分の辛い境遇を述べていることからすれば、かなり親しく、お互い自分の思いを素直に語り合える友であったのではないかと推測される。本作は、送別詞でありながら、自らの公務に追われる日々を綴った文字通り「自省自嘆の詞」といえる。

5 むすびにかえて

以上、「蘇軾の作詞における独り立ちの時期」に作られた送別詞を取り上げて考察してきた。その中で、都に旅立つ楊絵を送った「南郷子」詞では、送別の作でありながら、別れには言及せず、酒席に侍った二人の女性のことを中心に述べ、その美しさを称えている。言わば「笑顔での別れ」を演出したのである。また、同じ時に作られたもう一首の「南郷子」詞では、対外強硬論を述べ、これと同様の書きぶりは、後に作られた「浣溪沙」詞と重なる。従来の送別詞が惜別の情感を前面に出して詠うのに対して、これら2首の作品は、豪胆な気概を述べ、相手の気持ちを鼓舞する別れを演出している。更に趙昶を送別した2首の「減字木蘭花」詞では、なかなか叶うことない婦農願望を綴り、惨憺たる自分の役人生活を嘆き、節操を守る難しさを語る。更に「臨江仙」詞でも、山積する訴訟の対応に追われ「世俗から身を退き隠棲する」という志を忘れていた自分のことを述べる。旅ゆく人を送る詞でありながら、自らの境遇を嘆き、自由への憧れを詠む自省自嘆の作品になって

いる。これは、あたかも独りよがりのような印象を与えるが、包み隠さず自分の思いを相手にさらけ出すことで、気の置けない間柄であることを強調し、別れに当たり改めて親友同士の関係を確かめ合っているのである。それは「あなたは私にとってかけがえのない友達」という餞の言葉と解釈できよう。

「蘇軾の作詞における独り立ちの時期」に作られた送別詞を考察してみると、蘇軾が杭州を離れてから間もなく、意欲的にまた積極的に、詞という文学様式に新境地を開こうとしたことがはっきりと分かる。それは、彼が「作詞における独り立ち」を強く意識したからに他ならない。今後は、湖州で逮捕された後、黄州（湖北省黄冈）に流されてからの送別詞を取り上げ、その特徴を探り、蘇軾の送別詞の特徴をまとめていく予定である。

〔注〕

- 1) 拙著『新興与伝統』（上海古籍出版社、2005年）参照。
- 2) 西紀昭『東坡の初期の送別詞』（『中国中世文学研究』7、1968年）参照。
- 3) 『嶺東通識教育研究学刊』5巻1期（2013年）所収。
- 4) 原文は「歴來許多談論東坡詞的研究者，總以『豪放』兩字框限蘇軾的作品。但是就杭州通判時期的送別詞而言，婉約的特徵卻十分明顯，此時期的送別詞写得含思委婉，詞情蘊藉」。訳は筆者による。
- 5) 蘇軾は詩で皇帝を謗ったとして湖州知事の時に逮捕された。所謂『烏台詩案』である。この事件は彼の生き方、文学創作等に大きな影響を与えた。そこで、この事件後の作品については別の機会で論じ、本稿では、まずこの事件前の作品を取り上げて特徴を考察することにする。
- 6) 残りの8首は、別れるのに忍びない思いを素直に前面に出した作品であり、従来の送別詞の特徴を踏襲する。本稿では取り上げなかった作品については以下に参考のため原文のみ引く。なお、各詞には便宜的に通し番号を付けた。
 - (1)「定風波」：千古風流阮步兵。平生遊宦愛東平。千里遠來還不住。歸去。空留風韻照人清。
／紅粉樽前深懊惱。休道。怎生留得許多情。記取明年花絮亂。須看。泛西湖是斷腸聲。
 - (2)「醉落魄」：蒼顏華髮。故山歸計何時決。旧交新貴音書絕。惟有佳人，猶作殷勤別。
／離亭欲去歌聲咽。瀟瀟細雨涼生頰。淚珠不用羅巾裹。彈在羅衣，囟得見時說。
 - (3)「更漏子」：水涵空。水涵空，山照市。西漢二疏鄉里。新白髮，旧黄金。故人恩義深。
／海東頭，山盡處。自古客槎來去。槎有信，赴秋期。使君行不歸。
 - (4)「滿江紅」：天豈無情，天也解，多情留客。春向暖，朝來底事，尚飄輕雪。君遇時來紆組綬，我應老去尋泉石。恐異時，盃酒復相思，雲山隔。／浮世事，俱難必。人縱健，頭應白。何辭更一醉，此歡難覓。不用向，佳人訴離恨，淚珠先已凝雙睫。但莫遣，新燕卻來時，音書絕。
 - (5)「江城子」：相從不覺又初寒。對樽前。惜流年。風緊離亭，冰結淚珠圓。雪意留君君不住，從此去，少清歡。／軫頭山上軫頭看。路漫漫。玉花翻。雲海光寬，何處是超然。知道故人相念否，携翠袖，倚朱欄。

- (6)「臨江仙」:忘却成都來十載,因君未免思量。憑將清淚灑江陽。故山知好在,孤客自悲涼。
／坐上別愁君未見,歸來欲斷無腸。殷勤且更盡離觴。此身如伝舎,何処是吾郷。
- (7)「蝶恋花」:蕪蕪無風花自墮。寂寞園林,柳老桜桃過。落日有情還照坐。山青一点横雲破。
／路尽河回人轉柂,繫纜漁村,月暗孤燈火。憑杖飛魂招楚些。我思君処君思我。
- 7) 上海古籍出版社, 2002年。
- 8) 中華書局, 1998年。
- 9) この時, 蘇軾が湖州に寄ったのは, あくまでも密州に赴任するために経由しただけであり, 後の知事就任とは全く関係ない。
- 10) 前の「南郷子」詞に付けられた序に「張先と共にそれぞれ詞を一首ずつ作った(同子野各賦一首)」とある。
- 11) 原文は「他不願甘作“迂儒”, 而傾慕那“帕首腰刀”的“投筆將軍”和報国殺敵的英勇將領伏波」。訳は筆者による。「蘇軾詞的基線及其多層次性」(『蘇軾新評』〔中国文学出版社, 1993年〕所収) 参照。
- 12) 原文は「詔發樓船万舳舻」及「帕首腰刀是丈夫」, 其豪放之致, 在詞中便是一種明顯的開拓」。訳は筆者による。「論蘇軾詞」(『唐宋詞名家論稿』〔河北教育出版社, 1997年〕所収) 参照。
- 13) 蘇軾はこの時, 「祭常山回小獵(常山を祭って帰り小規模の狩りをした)」という詩も作っている。
- 14) 『蘇軾その人と文学』(日中出版社, 1986年, 60頁) 参照。
- 15) 『傅幹注坡詞』(上海古籍出版社, 2016年) では, 小序を「送東武令趙晦之失官歸海州(東武県の長官である趙昶が失職して海州に帰るのを送る)」としており, 「失官」という表現が使われている(322頁)。
- 16) 『論語』「公冶長」に「令尹子文, 三仕爲令尹, 無喜色, 三已之, 無愠色(楚国の宰相であった子文は, 三度宰相となったけれども喜ぶ様子は無く, 三度辞めさせられたけれども, 恨む様子は無かった)」とある。
- 17) 蘇軾が陶淵明を敬慕していたことについては既に多くの論考がある。例えば拙稿「蘇軾和蘇過父子与“遊斜川”」(『新興与伝統』〔上海古籍出版社, 2005年〕所収) 参照。
- 18) 松は常緑樹で節操の象徴とされる。例えば『論語』「子罕」に「歳寒, 然後知松栢之後彫也(寒い季節になってから, 松やヒノキが散らないことが分かる)」とある。人は苦境に立たされた時に真価が分かることをいう。「苦境に遭って節操を保つのは難しい」とは, 蘇軾が自らを省みて言ったものであるが, 同時に趙昶に向けて言っていると解せる。この時, 趙昶は職を失って故郷に戻るようになった。その詳しい経緯は分からないが, あるいは, 趙昶が自己の信念を通したばかりに, 辞職に追い込まれたのかもしれない。であれば, 趙昶は節操を保ったことになる。蘇軾は自身を省みながら, 趙昶に対して「苦境に遭って節操を保つのは難しいが, 君は自説を貫き見事である」と称えたとも解せる。
- 19) 蘇軾は「臨江仙」詞を作ると同時に「李公恕が都に赴くのを送る(送李公恕赴闕)」という詩も作っている。

蘇軾の送別詞について

〔付記〕

本稿は平成二十七年度日本大学商学部研究費の研究成果の一部である。